

「神が選んだ僕」という小標題が揚げられます。1節から始まった二つの安息日論争の最終14節に「ファリサイ派の人々は出て行き、どのようにしてイエスを殺そうかと相談した。」と記されている通り、この出来事を境にして受難の道のりが始められます。

さて、そのようなファリサイ派のうごきを察したイエスはそこを離れたと15節で記されます。「従った」という言葉は、弟子たちのイエスへの追従に用いられる言葉ですが、ここでは「離れるファリサイ派」との対比を強調するため「従う群衆」が描かれています。

この冒頭の15-16節はマルコ3;7-12を短縮したものですが、マタイはまずここでイエスの癒しの徹底さを再確認します。そして、続けてこのことを言いふらさないようにとの戒めの言葉が記されます。それからマタイは17節以下で、イザヤ書42;1-4を引用します。▼この引用文はヘブル語、ギリシア語、アラム語等、いずれの聖書にも該当しません。それぞれから寄せ集められた形になっています。おそらくマタイはいろいろな原典や訳文を並べて、自分の思想が最も良く反映されるようにイザヤ書を編集し直したと考えるのが妥当なようです。ここでマタイが主張しようとしたのは、引用文の出典の正確性などではなく、イエスとは誰であり、且つまた、イエスの活動は旧約預言の成就であったという点です。

まず最初に掲げられるのは、「言いふらさないように」と16節で述べられているように、イエスのメシアとしての活動は隠されていることが預言の実現だと記します。これは19節の「その声を聞く者は大通りにはいない」という言葉が該当します。また、二つの安息日論争を通し、ファリサイ派の非難が不当であることが明白になったのであるから、イエスは彼らを糾弾しても良いのです

が、イエスは彼らと争わず、彼らから離れます。これは19節の「彼は争わず、叫ばず」という預言の成就としてマタイは編集したのです。争わない理由は、イエスが弱く小さく貧しい者を救うという果たすべき任務を完了するためです。

20節の「正義を勝利に導くまで」という言葉は、復活に至るまでイエスは痛めつけられた者たちを救うメシアとして活動するのであって、「傷ついた葦を守り」「くすぶる灯心を消さない」と記し、21節「異邦人は彼の名に望みをかける」と付け加えて、イエスの復活の勝利を描き出したのです。

実は「争わず」も「勝利」も原文にはありません。マタイが作って挿入したのです。こうしてイザヤの預言した「主の僕」こそイエスであると宣言するのです。「僕」とは「子」という意味です。イエス、つまり初代教会の宣教対象である弱く小さく貧しい者と共に生きることが、神の意志を行う愛する選ばれた子だと記すのです。

正義とか真理とかいう言葉は何となく人を断罪しているかのような響きを持ちます。それはわたしたちがこれらの言葉を前にためらいを覚えるような、不正で不純で不実なところを持っているからでしょう。しかし、正義や真理は手の届かない天上から裁きとして下されるようなものではないとマタイは語るのです。そうではなく、神の側からそんなわたしたちのただ中に、そして同じこの世に、降されたイエスこそが「選ばれた僕」、正義と真理であると語ります。その「僕」はわたしたちの罪と共に歩まれるのです。